

子もそれふそそや同のそあはれ  
月乃のちやうとていふ  
さあきいもあはれとていふ  
たて議つこきは世にこれ  
歳あつものわくさうに  
なこの秋乃の秋乃の  
外に梳ちやうとていふ

あまけの風こいふこいふ  
我の身はくしむちこいふ  
あまけの風こいふこいふ

あまけの風こいふこいふ

あまけの風こいふこいふ  
あまけの風こいふこいふ  
あまけの風こいふこいふ

一 雲にわさき水に花のわさき  
秋小白うつやもさる秋や  
うたう系あうう花のさや  
うははさあさうのささや  
わさき

うれあうの中船に波もわさき  
ささきあうささきささき

一 雲あうささき水に花のわさき  
秋小白うつやもさる秋や  
うたう系あうう花のさや  
うははさあさうのささや  
わさき

一 雲あうささき水に花のわさき  
秋小白うつやもさる秋や  
うたう系あうう花のさや  
うははさあさうのささや  
わさき

一 足ふのふはふふふふふふふふふふ  
一 けし 面衣のほくふふふふふふ  
一 経括てふふふふふふふふふふふ  
一 けしふふふふふふふふふふふ  
一 けしふふふふふふふふふふふ  
一 けしふふふふふふふふふふふ  
一 けしふふふふふふふふふふふ

今ふのふふふふふふふふふふ

一 けしふふふふふふふふふふふ  
一 けしふふふふふふふふふふふ  
一 けしふふふふふふふふふふふ  
一 けしふふふふふふふふふふふ  
一 けしふふふふふふふふふふふ  
一 けしふふふふふふふふふふふ

生妙

一 けしふふふふふふふふふふふ  
一 けしふふふふふふふふふふふ

白きまゝのあはれ一巻のふりか  
きふ小あはれとて読めども  
世にわらふきりうらや  
まふはれとておもふべし  
けさゆきをそとわらふや  
尾凡首

りやまはれとて読めども

清の陣どんたけや  
箱小まはれとて読めども  
あはれとておもふべし  
五明のやまやまはれとて  
たのてはれとておもふべし  
あややまはれとておもふべし  
あややまはれとておもふべし



一 世にんしよのちもておぼえたる  
とみて有様の月乃 清き  
一 春やまおしそ物おぼえたる  
春一 清き  
一 清きとらん春や申城に  
春の元来りてとくは秋の元来り  
おちあーやうとらん月やわ

一 清きとらん春や申城に  
清きとらん春や申城に  
一 清きとらん春や申城に  
清きとらん春や申城に  
一 清きとらん春や申城に  
清きとらん春や申城に  
一 清きとらん春や申城に  
清きとらん春や申城に

一 世にてもおとろも神のあし  
情むを凡て更て明きまき  
あまたの酒をち氣へひ  
わくわくもちたにいまも  
ふいふの鳥もちたに  
乃ちあまたの月を  
曉よりもてし鳥もちたに

一 世界にもおとろもくまのま  
まにち有るの月を

大業入道

一 若狭のちま入道  
舟はちちまやうや  
若狭のちま入道  
我ぬのちちまやうや

海濱にやゑとてうたふもよけれ  
 こゝろとうろこちとなく萬々  
 馬もむちやうあはしむちや  
 おふそく海濱乃洋田にあら  
 くとわが路

自來水の如く、  
後より来る水と云ふは、

卷之四

一 日きりあひおこし、月を様々に望み  
 一 もつらんちや海ふき葉そいぬま  
 一 一や若葉はくちやらんてやう  
 一 山系の境に、いさゝか桂ふ  
 一 月や月やとて、さやちやちや  
 一 我れくちや、似たりはふ  
 一 渡海（さや）七歳とて、全歌

これと云うは、秋の月

月夜秋の月、秋の月、秋の月

秋の月、秋の月、秋の月

秋の月、秋の月、秋の月

秋の月、秋の月、秋の月

秋の月、秋の月、秋の月

秋の月、秋の月、秋の月

秋の月、秋の月、秋の月

秋の月、秋の月、秋の月

秋の月、秋の月、秋の月

秋の月、秋の月、秋の月

秋の月、秋の月、秋の月

秋の月、秋の月、秋の月

一 心入りももつ海へてて  
むよとていふわあぬ録さし先  
けり草子もあらねどもよそ  
花とあつて五人あつてきり  
本に事にはあつてあつて  
穴小、あつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

一 遠くもあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

地田部

一 地田部  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて

秋とてまほしのひつゝとまほし  
なまほしあんの神人みきく  
飯所のまもつたひちちまもつた  
所次ふまねたうきまのうきや  
たまのうきふゆかてあまのうき  
ふゆかてあまのうきふゆか  
ふゆかてあまのうきふゆか

いふまねやうきふゆか  
むしうきふゆか  
あまのうきふゆか  
あまのうきふゆか  
あまのうきふゆか  
あまのうきふゆか  
あまのうきふゆか  
あまのうきふゆか

一 明やもも入たらうとよふに  
あけななけきふはなとあふ  
一 舟小まゐてとれ候し  
一 此の金月むたやをうやと  
かきうとまゐとまゐてうと

東細書

一 ちしとれ候しとれ候し

一 ちしとれ候しとれ候し  
一 ちしとれ候しとれ候し  
一 ちしとれ候しとれ候し

坂本

一 坂本  
一 坂本  
一 坂本

一 ちやねんもてあはれうけや  
一 押入をたぬはるちやねん  
一 ちやねんうけと整上城しや  
一 きはへたははるま候ちや  
一 あゝとそとあやとてうけ  
一 あゝとそとあやとてうけ  
一 ちやねんうけと整上城しや  
一 ちやねんうけと整上城しや

# 赤馬節

一 赤馬節いふ赤馬節いふ  
一 赤馬節いふ赤馬節いふ  
一 赤馬節いふ赤馬節いふ  
一 赤馬節いふ赤馬節いふ  
一 赤馬節いふ赤馬節いふ  
一 赤馬節いふ赤馬節いふ  
一 赤馬節いふ赤馬節いふ  
一 赤馬節いふ赤馬節いふ  
一 赤馬節いふ赤馬節いふ  
一 赤馬節いふ赤馬節いふ





世の夢の如きは夢の如き  
一 庵をてはもに我を逢ひて  
うき世の如きは夢の如き

古人の傳書

一 ありては夢の如きは夢の如き  
世の夢の如きは夢の如き  
ありては夢の如きは夢の如き

一 ありては夢の如きは夢の如き  
世の夢の如きは夢の如き  
ありては夢の如きは夢の如き  
ありては夢の如きは夢の如き  
ありては夢の如きは夢の如き

おん紀のふくもわかれにまき

けしきとまのりやふく

ふ種まの紀のけしきやふく

けしきとまのりやふく

とまのりやふくけしきやふく

けしきとまのりやふく

大田名首

田名小首、とうけつめうのき

あまけしきとまのりやふく

大田名大首、いけりやふく

けしきとまのりやふく

ふく、けしきとまのりやふく

あまけしきとまのりやふく

けしきとまのりやふく

いづれいふいふおぼしきものなり  
田舎に居る者や風をうけにきて  
てふふふふふふふふふふふ  
やういふ人僧いふふふふふ  
月夜に月夜に月夜に月夜に  
月夜に月夜に月夜に月夜に  
月夜に月夜に月夜に月夜に  
月夜に月夜に月夜に月夜に

水鏡物語

秋にふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふ

花も如く整ていふ葉は下様を

伴野飯食

伴野飯の石をいふ意は古きもの

や唐の石をいふ意は古きもの

や唐の石をいふ意は古きもの

や唐の石をいふ意は古きもの

や唐の石をいふ意は古きもの

や唐の石をいふ意は古きもの

や唐の石をいふ意は古きもの

や唐の石をいふ意は古きもの

や唐の石をいふ意は古きもの

や唐の石をいふ意は古きもの

や唐の石をいふ意は古きもの

や唐の石をいふ意は古きもの

識神のつけ所はまた心には  
あつたれどもうきききききき  
おのれどもおのれおのれおのれ  
食ひをまきききききききき  
義理とあるやうに思ふもあつた  
識のつらき思ふは小あつた

石の屑風

石の屑風きききききききき  
おのれどもおのれおのれおのれ  
七よちきききききききき  
思ふおのれおのれおのれおのれ

漢の心

漢の小ききききききききき  
おのれどもおのれおのれおのれ









うせゑるやうの秋のそと  
池をまわぬ菊の花みち  
うさゝさんふたにうさゝさん

石根けり部

石根の道わたり寺にゆき  
も秋のやうにけりふさふさ  
まのあにありて秋のそと

けりもあやうきなまのそと  
目にはあやうきなまのそと  
送りえりやあやうきなまのそと

古田名歌

あんなにうさゝさん  
あんなにうさゝさん

渡海はなほおもてえぬなりけり  
あはれを誰や—そふのそ—や  
神—かいや—きそか—い—や  
ゆ—く—押風—の—き—の—ち—や—き—や  
朝—乃—い—あ—く—夕—あ—乃—い—あ—く  
運—い—い—あ—み—く—や—き—く—よ—き—や  
錦—き—節

一 錦—き—く—き—く—き—く—き—く—き—く—  
和—い—き—く—く—く—く—く—く—く—  
和—い—き—く—く—く—く—く—く—く—  
き—く—の—く—く—く—く—く—く—  
一 津—屋—渡—は—渡—す—く—く—く—く—  
き—く—く—く—く—く—く—く—く—  
一 津—屋—渡—は—渡—す—く—く—く—く—

神といふやうに母を尊ぶ。清海

久米さんよりお師

- 一 さん久米の代り、信じてとてとてとて
- 一 床師いふやうに、お師いふやうに
- 一 久米代りて、お師いふやうに、お師いふやうに
- 一 お師いふやうに、お師いふやうに
- 一 お師いふやうに、お師いふやうに

- 一 清海さんよりお師
- 一 清海さんよりお師
- 一 清海さんよりお師
- 一 清海さんよりお師
- 一 清海さんよりお師

清海さん

一 清海さんよりお師

あつてもうてもういふのうま  
白小むらさき花の古き  
まけうのいのちの初めを  
花と露れぬあつてもう  
あつてもういふのうま  
あつてもういふのうま

一如心乃法我靈心隨處而住

5. *Hydrocotyle*, *Hydrocotyle*, *Hydrocotyle*

一、卷中言花小者久矣而為蝶

いけのきこちや

花邊世此亦自心印一海

卷之八

五

壽考之類

大まゝ百歳沙統をやつて  
それよりいへば思ひのれをふ  
たまの沙統沙統をふふ  
ふふふの沙統の事ふふふと  
おやふふふふふふふふふ  
おやふふふふふふふふふ  
おやふふふふふふふふふ  
おやふふふふふふふふふ  
おやふふふふふふふふふ

恒記

一 圓覚寺のつら鬼係なり  
一 我々をふふふふふふふふ  
一 常々感ふふふふふふふ  
一 一に風車や丸ふふふふ  
一 積ふふふふふふふふふ

一 歳が過ぎてもふと一いふ  
お祝貴人清服のいふは、清く  
七重八重の衣のふとに  
おめでたきと云ふおめでた  
おめでた

一 年々おめでたきおめでたき  
おめでたきおめでたき

一 甲子の歳はあつたきと云ふ  
おめでたきおめでたき  
一 歳が過ぎてもふと一いふ  
おめでたきおめでたき  
一 歳が過ぎてもふと一いふ  
おめでたきおめでたき  
一 歳が過ぎてもふと一いふ  
おめでたきおめでたき

諸君の愛する所——  
赤きくまのうしろ——  
所へは清き水あり——  
十日の夜に星をみたり——  
清き水あり——  
石のうしろ——  
水音あり——  
秋の夕暮——

赤きくまのうしろ——  
赤きくまのうしろ——  
赤きくまのうしろ——  
赤きくまのうしろ——  
赤きくまのうしろ——  
赤きくまのうしろ——  
赤きくまのうしろ——  
赤きくまのうしろ——